

こ と ば の 生 活

西 尾 実

話はいぶ古いけれども、日本が占領軍の治下におかれていた当時、アメリカから教育使節団が前後二回、自然科学使節団が一回、人文科学使節団が一回来訪し、日本側委員と討議したり、各地を視察したりした。

その人文科学使節団が来たとき、わたしも日本側委員のひとりとして参加し、一か月あまり、毎週二回行われた討議に出席していた。そうしているうちに、発言のしかたにおいて、アメリカ側の委員と日本側の委員とのあいだに、一般的なちがいがあふことに気づかされてきた。それは、われわれの発言は、長くて要点がはっきりしないのに、彼らの発言は、短くて要点がはっきりしているということであつた。

協議が終つて、最後のレセプションが開かれた時、わたしは、使節団員のひとりに、そういう点について、向う側ではどう感じていたかをたずねてみた。すると、「日本のかたの考えかたは、直観的で、芸術的です。わたしたちの考えかた

は論理的で、科学的です。」という答えであつた。わたしにはしかし、このような外交的辞令では満足しきれないものがあつたし、また、かりにそれが本来的には当つていゝにしても、あの程度の論理性をも欠いている「直観」や、あの程度の科学性をもふくみえないような「芸術的」にあぐらをかいて、それを民族的特質だなどと安心してはいられないように思われたので、もう一度、卒直な意見を求めた。すると「そういうえば、お国のかたがたの話しぶりは、前置きが長く、途中でも言いわけが多いようですね。」という答えだつた。

その後いく年かを經過した昨年秋、名古屋で開かれた文部省直轄および大学附置研究所長会議の席上、あらたに京都大学基礎理論物理研究所長に就任した湯川秀樹博士が、同年九月、日本で開かれた国際理論物理学会の感想として、つぎのような話をされた。

学会の開催にあたつて気がかりだつたのは、日本側の学

者の語学力であつた。進行につれて、それはどうにかなることがわかつてきた。しかし、どうにもならないのはよその十三か国の学者たちの議長ぶりのみごとさと話しぶりのうまさとは、日本側の学者たちのそれにくらべて段ちがいであるということであつた。

よその国の学者たちは、誰が議長になつても、まことによく討議をつくさせる。また誰が発言しても、要点をとらえていい、よくわからせるようにいう。——論文でも同じである。つまりわからせるように話し書くことが、学問研究と別ではないことになつている。日本のように、「学問はできるが話しはまずい。」とか、「学力はあるが文章はへただ。」とかいうような考えかたをしていない。理論物理学の例でいうと、日本の学者のように数式にたよりすぎないで、ことばで話す。

大体こういう意味の話であつた。わたしには、前年来氣になつていたことが、裏書きされたように思われた。

——たしかに、日本の学界では、研究方法としての共同討議は、一般にまだじゆう分な意味では発達してないし、それに対する、方法としての自覚もはつきりしていない。

しかもこの、学問における討議法の未発達は、われわれの社会における日常の話しあいや会議が、きわめて幼稚なままに放棄されていることともつながりのある事実である。われわれの会議の幼稚さは、われわれの選良だといわれている国

会議場に、何よりも明らかに示されている。国会の討議や地方議会において、議事法はすでに早くからとり上げられているにかかわらず、それはひどく形式的で、討議の実質において、いつこうその原理が生かされていない。少し勝手が通らなくなると、重要問頭の討議中に、バカヤローなどとなりあつたり、ことばのかわりに、灰皿がとんだりする程度である。こういう言語生活の実態をかえりみると、学問の方法としての討議が成熟する可能な地盤はなさそうである。——

会議の第二日は部会であつた。開会前の雑談に、前日の湯川さんの話が出た。それにつけて思い出されたのは、目の前にいる都留さん（一橋大学経済研究所長）の、いつもの発言ぶりである。わたしは、その都留さんに、「湯川さんの話をきいてみると、いつそうあなたの話しぶりのりつばさははつきりしてきましたが。」といった。都留さんは、「もし、そういつてもらえるものがあるとすれば、それは、ほくがアメリカの大学に十五年いたということですよ。」といった。

「アメリカの大学では、そのためにどんなことをしていますか。」「大学へはいった一年間、必修のなかの必修としてイングリッシュ・コンポジションをやらされました。しかも、学生を二十人以内においておいて、教授は大変な意気込みで一人一人の指導をやります。」「そのコースにはどんなことをやらせますか。」「まず、グランマーです。ハイスクールのグランマーのあとをうけて、そのさきをやります。」「たとえばどん

なことですか。」「センテンスで、いくつか語がならんだとき、どこにコンマをうち、どこに接続詞を入れるかというふうな……。」「文表記の方法の訓練ですね。そのつぎは?」「パラグラフの立てかた。それがすむと、英文学というコースでした。」「では、文章構成にすすみ、最後に文学表現をというわけですね。」「

この問答からわたしの教えられたことは、語表記から文表記へ、文表記から文章表記へ、最後に文学的表現へという進みかたであるということであつた。文章表記としてのパラグラフのきりかたの実習は、わが国ではほとんど行われていない。その点で、文章構成が論理的整頓を得ていない。文学といわず、あらゆる文章を文章たらしめる基本条件として、段落のきり方に心を用いることは、われわれの談話や文章をもつと客観的な表現に生かすために欠くことのできない方法である。都留さんは、アメリカの大学でやるイングリッシュ・コンポジションには、談話のコンポジションと文章のコンポジションがあるともいわれた。談話と文章にわたつて、コンポジションをねることは、きわめてだじじな思考の訓練である。

これは、たまたま聞きえたアメリカの言語教育の断片である。しかし、この類の言語訓練が徹底しておこなわれているのは、決してアメリカだけではないことは、湯川さんの話されたように、国際理論物理学会で、日本以外の諸国の学者た

ちの議長ぶりのみごとさと、話しうまさ、日本の学者とは段ちがいであつたという事実によつても明らかである。

いまだきこんなことをいうと、民族的自信のない発言だといわれかねない。しかし、これだけの国民生活の欠陥に直面しながら平然としているのが、ほんとうに国民的自信なのであるうか。もしそうであるならば、かつての「必勝の信念」のように、それこそ一國の運命を誤るものである。他國のすぐれている点をすぐれていると認め、自國の足りない点を足りないとして認めて改善していくことこそ、ほんとうに自信のある国民の態度ではなからうか。

われわれがいま、すぐれた共同研究の方法を身につけ、議會らしい議會をもちうるためには、何よりもその地盤として、われわれの日常の話しあいを整えていくことがだいじである。これは何でもないことのようにであるが、実は容易ならぬ努力を要する、一大事業である。それは単なる口さきや筆さきのことではなく、日常の言語生活を革新することによつてのみ達成されることである。しかし、それは、われわれの生活を幸福にし、われわれの文化をほんものにしていくためには、欠くことのできない基礎的条件である。